
Fate/stay nightでアサシン無双があってもいいじゃない

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate／stay nightでアサシン無双があってもいいじゃない

【Nコード】

N2613BA

【作者名】

葛根

【あらすじ】

fate／zero、fate／stay nightで不憫なサーヴァントであるアサシンが大活躍するお話。奇策、謀略、計略、策謀なんでも有りの外道マスターと相性抜群のアサシンが大活躍。

プロローグ（前書き）

この小説はf a t e／s t a y n i g h tの二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

プロローグ

——10年前——

始まりに至る物語の終焉。

ある男の命令により、聖杯は使われないまま破壊された。

衛宮切嗣。かつて「魔術師殺し」と徒名された殺し屋だった。

そのスタイルは魔術を目的遂行の為の手段として、本来魔術師に忌避される近代兵器を躊躇無く使用する魔術師であった。

その魔術師が何を望み聖杯戦争に参加したのか。

故人である人物に問うても解答を得ることなどできないのだ。

誰よりも仕事が好きで、誰にでも恐れられている男の話しよう。
その男は魔術師であった。類稀な才能を持ち、かつて「魔術師殺し」と悪名高い衛宮切嗣の徒名を次ぐ人物である。

男は客観的な己の評価を下卑た。自己評価は身体強化系に特化しただけの欠落魔術師。

故に、使える道具は使う。だからこそ、衛宮切嗣の名が付き纏っていた。

「魔術師だって近代兵器くらい使う。近代機器だって使う。パソコンに携帯電話。拳銃に、機関銃。便利なものなのにな……」

魔術師として欠落している為か、それを補うように時代にあった

道具を使い切る事に何の抵抗もなかった。だからこそ、かつての外道魔術師を知る者達からは、「魔術師殺し二世」と語られていた。

皮肉だ。その男が「魔術師殺し二世」と衛宮切嗣を背景に語られ始めた頃に、衛宮切嗣の遺体から魔術刻印を盗み取り移植したのだ。これが皮肉以外になんと言うのか。

元々、衛宮家の魔術である「時間操作」に興味があった。身体に馴染むまで時間は掛かるだろう。しかし、その男の身体はまだ幼さの残る身体であった。



たけべたける
武部武。極東の地。聖杯戦争が行われる冬木市に入る前に必要な名前だ。

戸籍を買い取ったのだが、なかなかどうして響きの良い名だ。身体強化系に特化している魔術師の自分に取って武は人生の大半を伴侶として共に生きてきた、言わば戦友なのだ。

「さて、初日本だ。まずは――」

右手に刻まれている令呪を見る。半年前に刻まれた令呪。早期からアドバンテージを握るためには情報戦に勝利しなければならぬ。だからこそ、アサシンの英霊を呼び出した僕は優勢だ。

アサシン。

真名はハサン・サッバーハ。

百の貌の19代目のハサンであり、その宝具は多重人格からなる分裂。

つまりは、アサシン1人が最大80人まで分裂して増える事ができるのだ。

情報収集から、隠密行動、諜報活動に長けるアサシンだから、僕

との相性は良い。

「間桐、遠坂、アインツベルンに赴いて情報を集めろ。後一人、衛宮の家に赴きそこに住んでいる衛宮切嗣の跡継ぎの様子を仔細に観察して僕に報告するんだ」

『了解です。マスター』

——第五次聖杯戦争開始まであと約4ヶ月。



武部武という偽名を名乗って早一ヶ月が過ぎようとしていた。貯蓄していた資金の大半を使い込んで購入した兵器、電子機器も揃い後は聖杯戦争の開始を待つだけとなっていた。

「アサシン。どうだ？ 精密機械の扱いは慣れたか？」

アサシンの持つ専門スキル専科百般により、科学兵器や、電子機器といった現代の兵器、機械を学習済みであった。

取り分け、肉体的に他のサーヴァントに劣るアサシンだが、相性というものがある。

他のサーヴァントはどうあれ、アサシンの基本戦闘スタイルはマスター襲撃にある。よって、まさかサーヴァントでありながら近代兵器を使用する、その発想自体他の魔術師にも思いつかないであろう。

対マスター戦において絶対のアドバンテージを誇るアサシン陣営に更なる僥倖があった。

それはアサシンが前回の第四次聖杯戦争でもアサシンとして使役されていたということである。それも、その時のマスターは今回の

聖杯戦争の監督者である言峰綺礼だったという。

だからこそ、冬木教会にもアサシンの一人を監視させる目的で早々に配置できたのは僥倖である。何故なら、前回マスターとして生き残った言峰綺礼が今回もマスターに成り得る可能性は高く、その素性や、召喚するであろうサーヴァントを早期に知り得る事ができるからである。

さらに、前回の生き残りだった衛宮切嗣の情報も幾つか手に入っただのだ。

武部武に取って良い印象のない名前ではあったが、その経歴や魔術師殺しとしても考え方は非情に似たり寄ったりであり、「魔術師殺し二世」と揶揄する人物達の的は得ていると感心したほどである。使い魔を持って、監視するのは魔術師の鉄則である。だが、それを科学の力で行うのは現代の魔術師では武部武以外にはいないであろう。元々、使い魔に監視カメラを埋め込んでいた武部武だったが、その先人である衛宮切嗣も同じような事をしており、ますます、「魔術師殺し二世」が身に染みてきたと自笑してしまうのだ。

「何か可笑しな所でもありましたか？」

男のアサシンの間に武部武は答える。

「いや、聞けば聞くほど衛宮切嗣と僕は似ているな、と思ってな。前回の聖杯戦争で彼がセイバーのクラスのサーヴァントではなくアサシンのクラスのサーヴァントを召喚していたらと思うと……。いや、無駄な思考だな。ともあれ、僕ほど今回の聖杯戦争で優位なマスターはいないだろうね」

「はい。必ずやマスターは聖杯を手に入れるでしょう。そして私共の悲願達成もまた、確実に達成されるでしょう」

嗤う。

今度は自笑ではなく、確信を持って。



最弱のサーヴァント。

最強のサーヴァント。

果たして誰が聖杯戦争を生き延びることができるのか。

配点…（始動）

第一章 アサシンたんペロペロ（前書き）

この小説はf a t e／s t a y n i g h tの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第一章 アサシンたんペロペロ

●
アサシンとの感覚の共有から様々な情報を得られる。これは情報戦で有益な視覚情報である。また、使い魔の監視カメラから、ライブ中継でパソコンに映像が送られてくるのも最新機器の恩恵である。さらに用意周到に据置式の隠し小型カメラや盗聴器まで仕掛けたか
いもあり御三家の日常は全て筒抜けであった。

二ヶ月間もの間、盗撮、監視、諜報、斥候の類をしていれば嫌でも対象人物の人となりは理解できる。

注目すべき相手は遠坂家の遠坂凜であった。魔術師として恐らく今回の聖杯戦争で最も優秀な人物だ。

念入りに、それこそ生理周期すら分かる程仔細に監視した。結果として、やはり、最大の敵は遠坂凜であった。恐らく彼女のステータスから「三騎士」のいずれかを召喚するだろう。

しかし、学生生活を見るかぎり、ここぞと言う際に失敗する特性が見て取れた。詰めが甘く肝心なところで凡ミスを犯すという欠点は遠坂の特性なのだろうか。

魔術師らしく、機械の類に対して拒絶反応を示しており、武部武に取っては襲撃しやすい相手である。

序盤戦から終盤戦まで彼女には生き残って貰い、他サーヴァントの相手をさせてその隙についてマスターを漁夫の利で掠め取る。それが武部武の思案であった。

要注意人物は遠坂だけではない。間桐には妖怪がいる。
間桐臓硯。

手のかかる相手だ。恐らく今回の聖杯戦争で何かしら裏で糸を引

く人物であろう。だが、孫である間桐桜、間桐慎二の滑稽な様は見
ていて飽きない。今回の聖杯戦争でマスターとして参戦しないので
あれば、生かして置いてもいいだろう。聖杯戦争終了後に魔術協会
にでも虚偽報告して刈り取るか。後の金の種だ。

特に間桐桜の方は、元は遠坂の娘だ。確実に高い魔術の素養を受
け継いでいるはずだ。

だが、見る限り、間桐臓硯の思惑は間桐桜の生む子孫にありそう
だ。なるほど、あの妖怪は気の長い計画があるみたいだ。

アインツベルンに至っては未だ日本に入国していない。だが、外
部協力者によればバーサーカーのクラスのサーヴァントを従えてい
るらしい。

そして、衛宮切嗣の養子。衛宮士郎。

落胆。その一言に尽きる。初歩の魔術を使っただけのもの魔術
師と呼べる程ではない。今回の聖杯戦争に参戦することもないだろ
う。だが、万が一の可能性を考えて一応は監視を続行する。

言峰綺礼については、アサシンの意向もあり、注目すべき人物だ。
監視役ではあるが、恐らく、聖杯戦争に関わってくるキーパーソ
ンになるだろう。現在は神父として振舞っているが、要注意だ。然
るべき時を待って確殺する。



穂群原学園。主要人物が通う学校だ。だからこそ、罠を仕掛ける
意味がある。

ちょうど、日本は正月時期であり、学校も休校している状態であ
った。耐震性の点検を装い、ビル爆破解体の要領で爆薬を仕込んだ
のだ。この作業でやはり、サーヴァントの利便性を実感できた。

本来数時間掛かる爆薬の埋め込みをアサシンの分裂、分担作業で1時間ぴったりで終えたのだ。

これで少なくとも、遠坂、間桐がマスターになった場合に使える資産になる。

生徒全員を人質に取るか、まとめて爆殺させるか、サーヴァント同士の戦いの場として誘い込んで爆殺させるか。どれをとっても武部武達の有利に働く仕掛けであった。

出来ることなら霊脈にも罠を施したかった武部武であったが、学校に仕掛けた爆薬が切れてしまった為にそれを断念した。追加発注するにも、資金面と品物が届く時間を考えると時間が足りなかったのだ。

それに、ここまで優位に進んでおり、そこまで用意周到に策を巡らさなくても良いのでは無いかとも考えていた。その為、多少の優位を捨てて闘争に準じるのもいいだろうと思ったのだ。

側面的ではあるが、武の心得もある武部武に取って闘争もまた、心躍る物であるがゆえの心情であった。



収めた武すらも、道具として考える。身体強化系に特化した魔術師である武部武は対サーヴァント戦の為にアサシンと近接戦闘の訓練を行っていた。

生身の魔術師が例え最弱とはいえサーヴァントのアサシンに敵うはずが無い。

だが、武部武は一線を超えた人物であった。驚愕に震えるのはアサシンである。

肉体的な頑丈さで言えば、アサシンよりも固く、攻撃力の一点に至っては、アサシンをも上回るほどである。

アサシンのクラスと互角に戦えるマスターを相手に全てのハサンは確信する。

このマスターとの契約は幸運であった。マスターの中でも最強戦力だろう。そして、殺人者としても超一流。改めて、アサシンはマスターとの相性の良さに満足するのであった。

「組手で勝てるとは思わないが、良い訓練相手だ。これから頼むぞ、アサシン」

「ご謙遜を……。マスター連中に取っては脅威ですよ。武部様」

運命というものが本物ならば、アサシンに取ってこの運命は必然。聖杯戦争開始までにどこまでアサシンの持つ暗殺術、戦術、殺人術を教え込めるか、アサシンは密かに仮面の下でほくそ笑んでいた。

――第五次聖杯戦争開始まであと約2ヶ月。

●
斥候、謀略。

卑劣と心情。

最弱と最強

配点…（マスター）

●

補足

主人公は衛宮切嗣と言峰綺礼を足した感じとってください。

チート……って言うなよ。

後、アサシンの前回の記憶の引継についてですが、その辺りはこのSSではご都合主義が働いて引継でいると言う感じで一つよろしく。一応、前回聖杯が壊された時にバグができた為にアサシンは記憶を引き継いでいる。とか考えました。

まあ、色々と思う所があるでしょうがこのSSに関してはこんな感じで許してね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2613ba/>

Fate/stay nightでアサシン無双があってもいいじゃない

2012年1月7日09時46分発行